

武蔵野日曜集会

新生

——ヨハネ伝第3章1～15節——

1967年8月20日（武蔵野）

小池辰雄

●上から生まれなければ 神の国の中に居る 水と霊によりて生れずば 「すみません」
「ありがとう」 新しく生まれるためには祈れ キリストの本願人となれ 聖霊が臨むこと
が新生 気なるキリストを受けとる 今度は自分が風となる みんな落第 お前たちの罪
は全部赦してやる キリストが欲したままの真のキリスト教 御霊の権威 人間は遊ぶと
きにのみ全き人間である 素朴な信仰

【ヨハネ3:1～15】

「ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。
夜イエスの許に來りて言う『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神
もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』」³ イエス答へ
て言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の国を見るこ
と能わず』⁴ ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争で生るる事を得んや、再び
母の胎に入りて生るることを得んや』⁵ イエス答へ給う『まことに誠に汝に告
ぐ、人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能わず。肉によりて
生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。』⁷ なんじら新に生るべし
と我が汝に言いしを怪しむな。風は己が好むところに吹く、汝その声を聞け
ども、何処より來り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者も斯の
ごとし』⁹ ニコデモ答えて言う『いかで斯る事どもあり得べき』¹⁰ イエス答
えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる事どもを知らぬか。
¹¹誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを証す、然る
に汝らその証を受けず。』¹² われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを
言わんには争で信ぜんや。』¹³ 天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇
りしものなし。』¹⁴ モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げ
らるべし。』¹⁵ すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』



●上から生まれなければ

「ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。」

「アルケー」と言いまして、「長」であるという。いわゆるサンヘドリンという宗教会議の長老の一人です。

²夜イエスの許に來りて言う

昼間來たのでは、ちよつと長老ともあろうものが非常に若いイエスの所にと——イエスは一般にその当時の祭司・学者たちからは除け者にされている人ですから。除け者になっているというのは、ひとつは畏れられているわけですから——そんな関係で、夜にやつて來たのだらうと思う。

『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行う

これらの徴は誰もなし能わぬなり』

一応、いわゆる信仰的・神学的には正解をするわけです。今のクリスチャンでも、何か聖書のことを聞くと、聖書の勉強をしている人はみんな一応、正しい答えはしますよ。正しい答えを口でするということ、その世界にいるということとは全然別問題です。正しい答えができることは決してわるくはない。けれども、それは知識的にできているだけのなしで、存在的に告白されていることではない。告白されているということと、説明されていることは別問題です。

私たちの聖書に対する在り方は、聖書を告白することになるまでは、これはウソでないにしたところで、生命の世界ではない。聖書の現実ではない。これはハッキリ言える。ところが、説明的なクリスチャンが非常に多いわけです。ある意味においては、告白の角度もあるでしょう。けれども、それはまだ本当の魂の奥から言っていることになってない場合もあるわけです。私が自分の無教会時代のことを考えてみると、私は全部説明だったなんてことは自分でも思いません。そうとう感じてものを言っていました。けれども、それは知識と感情とが混ざったようなもので、魂の奥底から本当の確信をもつてというのとまたちよつと質がちがうということを、今、自分自身について思うわけです。

ニコデモもやはり知的な角度から言っている。「神さまが一緒にいらつしやるなければ、そうでない」と。それはその通りですね。キリストは「インマヌエル」「神我らと共に」という名前を持っていらつしやるけれども。

³イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の

国を見ること能わず』

これは皆さんもさんざん聞いて知っている言葉ですね。この「新たに」という言葉は「アノテン」という字ですが、「上から」とも訳しているようですけれども、時間的に言うならば、「新たに」です。「カイネー」という言葉がある。新約聖書の「新」です。質的に新しいことがこの「新たに」です。流行品が常に新しくなるという、そういう新しいとは違う。



それはまたすぐ古くなる。質的に新しくてもう古くならないもの、そういう意味における「新た」なら、それは「カイノス」です。「カイノス」であるか、それからこの「アノーテン」という「上から」ということ。「上から生まれなければ」の「上から」というのはなにも自然科学的な「上から」ではなくて、霊的な「上界から」ということです。それが「新たに」ということ。

とにかく、空間的にも時間的にも、「上から」「新たに」ということをもうひと別な言葉でいうと、「霊の世界から」ということ。これが一番ハッキリする。題に「新生」と書きましたが、これは即ち、「霊生」ということ。「新生」は——藤井先生も『新生』という本を書かれました、非常にパトスの満ちた本です。これは岩波から先生が一番先に出した本ではなかったかな。「みんなキリストの所に来よ」というようなことだね——むしろ、「霊生」ということ。私は「霊生」という題で詩を書いたことがあります。

●神の国の中に居る

「新たに上から霊によって生まれなければ、神の国を見ることができない」

という。「神の国を見る」というのは、外側にあるのを見るということではない。「神の国を見る」ということは、神の国の中にいなければ、これは見えないんです。外からこうやって花を見ているように、「あそこに神の国がある」なんて言って、こちら側から何か空想して、幻の世界を見ているように見ているのが、「神の国を見る」ということではない。それは神の国を空想しているだけです。

「神の国を見る」というときには、神の国の中に居なければ言えない。「神の国」というのは「神の支配し給う所」ということ。「バシレイア」という言葉が「神の支配」とも訳される言葉です。神の臨在し給う所、それが「神の国」。マタイ、マルコ、ルカは「神の国」とか「天国」とか言う。ヨハネ伝では「永遠の生命」とよく言う。ここではしかしやはり、「神の国」という言葉が使っている。實在の神が現に支配してあったもうところが「神の国」です。それはどこですか。どこでもそうなんです。本当は、神の国ならざるところはないんですよ。神の支配してあったもうところであるのに、それをそっち側から立ち去ろうとしている。ご苦労さんはなしですよ。たとえば、この部屋には空気が充満して太陽の光が満ちている。この空気を閉め出してしまつて、人造空気をそこに作りだす。太陽の光を閉め出してしまつて、電気の光を灯す。せっかく太陽の光と空気があるのを閉め出して、どこでもそうであるのに、これを閉め出して、自分でもって勝手なことをやっている。人間はそういうバカなことを、我々はやっているわけですよ。神の国を、せっかく神の支配している世界なのに、その一番大事なことを要らんとしている。

神の国の中に、本当にその支配の中にいれば、それは内観できるわけです。内側でちゃんと観ている。



「神の国はそこらここらに在ると、お前たちは思うな。お前たちの中に在るぞ」

とキリストは言われた。神の国をどこか外界に求めてもダメ。内に求めよと。

シラーの「信仰の言葉」という詩があります。

「神の存在と自由と靈魂のことは、私たちの内側の声がこれを証明するではないか」

というようにことを言っていますが、正に内の世界です。昔から告白的宗教的な真理を探求しようとする人はみな内に向かっている。キルケゴールなんかはその最たるものの一人ですけれども。外に向かつて観ているうちはダメ——外においてもなお内を観るという見方もあります——これはそうなると、もう内外相即しなければ。実はそれが一番本当の世界なんです、「内、内」と言ったってね。こうやって花を見ていながら、花の中を見て、花と一緒に或るひとつの世界に入ってしまう、というような見方は、もはや外を見ながら内を観る。内を観ながら、また外が見えるという内外一如の見方である。

「神さまは超在して、一切のものを貫いて、またその中にある」

とパウロがエペソ書の中で言っているとおりなんです。超在、貫在、内在という自由な事態が自分でハッキリと——超在の神、また貫いて在りたもう、また内に来たりたもうところの神——そうなってきたら、楽になるわけです。

●水と霊とによりて生れずば

ところが、ニコデモさんは一向にダメなんだな。今の何とか神学者だとか、何とか牧師さんなんていうご連中も、ニコデモさんと同じようなのがたくさんいるわけです。なにも私は悪口を言うわけではないが。見えることができない。見ることができないから、ニコデモはすぐ何か見えるかと思つて一生懸命で考えているけれども、それはダメですよね。

⁴ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争で生るる事を得んや、

もう私はこんなに年取つて、少し白髪が出てきましたのに、どうしてまた生まれることができるのかと。

再び母の胎に入りて生るることを得んや』

と。「新たに生まれずば」と言つたのに対して、全くそれを取り違えている。

キリストの言葉は仕方がない。五感に訴える言葉で言いますよ。それを、その五感に訴える世界でもつて解釈したらば、受けとつたならば、全然それは受けとりそこないです。言葉は五感に訴える。見たり、聞いたり、味わったり、触ったり、嗅いだりといったようなことでもつて言いますけれども、それをもつて実はもうひとつ奥の世界を表現しているだけのほなしです。それが解らないものだから、そういう答え方をしている。

⁵イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生れずば、

神の国に入ること能わず。

今度は、「入ること」だ。神の国に入ることとはできないと。



⁶ 肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。

胎児は羊水の中に育つてきて、それから出てくる。ところが、キリストは、「水と霊によりて」と言うのは——今度は羊水でなくて、いわば霊水だな。霊水に押し出されるような——即ち、

「水のバプテスマ、霊のバプテスマによらなければ」

ということ。水のバプテスマを受け、霊のバプテスマを受けなければ。いわば、霊の水から生まれてくるような生まれ方をしなければと。

●「すみません」「ありがとうございます」

この頃の若い人たちは非常に感謝の念が薄くなってしまった。私は学校の生徒を取り扱っているからそれがわかる。なにかすべてが当たり前だと思っている。

「恩を忘れる人は人ではない」

と、いつか塚本先生もそう言っている。人間に価値しないと。犬というのは実によく恩を覚えてるね。犬にも劣るような人間の事態がしばしばあるわけです。

この水のバプテスマの方は、今度は感謝ではなくて、「すみません」という方だ。

「ありがとうございます」

というのと、

「すみません」

というのと二つある。人間は、この「ありがとうございます」というのと「すみません」というのと、これを忘れたら、魂の世界はダメなんだ。人にぶつかってもこの頃は、「どうも、失礼しました」なんて言わないものな。「なぜ、ぶつかりやがるか」かなんて。ドイツ人というのは礼儀正しい。電車の中でも若い人は必ず立ちます。結局、すべてが宗教的な土台からきているんですけれども。日本の社会を改造しようと思ったら、なんといつても宗教的な土台から始めなければならぬ。

水のバプテスマは即ち、神さまに、

「どうもすみませんでした」

と悔い改める。霊の世界は、この「すみませんでした」を忘れると、傲慢になります。そうしたらもうハッキリと霊的に脱落する。それと感謝の念と、この二つ。両方とも、マイナスの言葉とプラスの言葉ですが、このプラス・マイナスは非常に大事なプラス・マイナスであります。そうすると、霊のバプテスマは、これは本当に感謝の方に展開するわけだ。「すみませんでした」という水のバプテスマと、霊の、

「ありがとうございます」

という霊のバプテスマ。この水と霊です。ある写本によつてはこの「水」という字がない。「霊」という字だけなんです。あとからこれを付けたかどうか知らんけれども。



とにかく、この「すみませんでした」と「ありがとうございます」とを両方とも、あの洗礼のヨハネからバプテスマを受けた時に、キリストは両方とも渾然と一つにしてしまったわけです。人のためにキリストは、自分はちつとも「すまない」ことはないんだけれども、「俺はちつとも済まないことはない」なんてキリストは言わない。人の済まなかったこともみんな背負ってしまつて、

「どうも、神さま、すみませんでした」

と言われた。水のバプテスマを従順に受けた。それと同時に、この御霊のバプテスマを受けた。

●新しく生まれるためには祈れ

キリストがあそこで御霊のバプテスマを受けるには、ちゃんと準備があつた。これは聖書に書いてない。今、私は急にそのことを思ひつきました。あのところでキリストが聖霊のバプテスマを受けたということは、その前に彼は30年——大体、あの頃は30でしょ。12歳のことがちよつと書いてあるが、12歳から30までのことは何も書いてない。一体、どこで何をしていたのだろうというわけだな。けれども、書いてなくても、一番ハッキリしたことは——彼は祈っていた。彼の生活の中心は祈りにあつたということです。祈りがなかったならば、あのようなことは絶対に起きない。キリストは何をしていても、いつも彼の生活の中心は祈りにあつた。

祈りというのは、口ではなくて、体で祈る。体で祈るとは、自分を神の中に、神の懷に投入することです。祈りとは投げ身することなりと。沈黙で祈つても、ささやいて祈つても、大声で祈つても、どれでもいいですよ。どれでもいいが、それはみんな身を投じていなければダメです。身を投じていなければ——私たちは坐っているんだが——しかし、祈りの世界は、投じていなくて。イエスはとにかく、長いこと祈つて準備をしておられた。

ペテロがローマの兵隊の耳を切つたとき、キリストは、

「なぜ、そんなことをするか。剣を納めろ」

と言つて、その耳を付けてやった。もう、聖書の世界の次元というものは、これを笑つたらダメだ。だから、私が言っているでしょ。聖書の文字というものは、その現実を到底表わしきれないでいる。聖書の文字の奥からの呻き、叫び、讚美、それが響いてくるような読み方をしなければ、本当は聖書が読めてない。聖書の文字の意味がどうだこうだと詮索しているのは、本当は末の末のはなしだ。今のいわゆる聖書解釈だとか、神学だとか、何をどう言つても、それは一応ごもつともであります。それをわるいとは言いません。けれども、実は本当の世界には触れておりませんということ。

どうぞ、皆さんは、聖書の現実というものはなんと驚くべき現実であるかということに驚嘆しながら、平伏しながら読んでいかなくてはいいかん。そうすると、自分は知らんけれ



ども、知らない間にそういうような世界に入れられているんです。いわゆる霊的な現象が起きなくなっていていいですよ。けれども、現象の奥の世界に入っている。そうしたら、神さまは必要に応じて、グググッと驚くべきことをその人を通して成し給う。

とにかく、魂の世界はごまかしがきかないですから、自分でそこを生きるよりかはかに仕方がない。ただ生きるよりかは仕方がない。だから、キリストはそれを言っている。「新しく生まれなければ」と。

「新しく生まれるためには祈れ」

と、キリストは「祈れ」ということをここで言っていらいっしやらないけれども、この「祈る」ということがどうしても必要なんです。

●キリストの本願人となれ

「天性」なんていう言葉があるね。私たちがいただいているこの天の性質。小さい赤ん坊なんかを見ていると、本当に無心だよ。本来、人間はああいう純粹なきれいなものであったのに、だんだん小川が、泉の水がだんだん濁ってしまうように濁ってしまう。もう一遍、天性的なところに帰らなくてはいいかん。

あの創世記は、アダム・イブの墮落の話からずうと来ているけれども――神話は神話ですよ、しかし――神話の形を通して、いかに私たち自身の一生涯を聖書の歴史そのものが表わしているかということがハッキリしてます。樂園は、幼子の世界は、喪失されてしまった。幼子は何も知らないで、ママシの穴に手をつつこんでいるような事態。イザヤ書の11章かどこかに書いてある。そういう天国的なところが失われたから、イザヤがもう一遍そういうことを書いた。

悪魔も幼児を刺すわけにいかん。それはちゃんと幼児には神の守り天使が伴っている。キリストが言われたとおり。私たち一人ひとりにも、守護霊というのがついていてるわけです。守護霊に見はなされたらお終いですよね。神さまに、キリストに直結していく魂ならば、必ずキリストは助けの霊を、その人を助ける天使をくだして下さるわけです。そして、あわやという時に助けられる。

道徳法則というけれども、道徳法則というのは実はもう神さまの霊法からずっと貫いている。道徳を道徳としてただ切ってしまうからいいかん。だから、いわゆる堅苦しい道徳になってしまふ。霊的な法則が全部、展開しているところがみな道徳法則の世界です。その一番根源の霊的法則のところを切ってしまったって、「道徳、道徳」なんて言っているが、いつまでたっても「道徳」ではどうにもならない。そうすると今度は、あぶれの間人

「もう道徳なんかいいんだ」

なんて言って、勝手な自由になる。それはとんでもない。この道徳というものは堅苦しいものではない。もう実に氣持のいいものだ。本当に律法を満たすものはキリストの霊の



世界である。霊的な法則の世界は自由自在である。

だから、「水と霊とによつて生まれなければ」と言う。

「すみません」

というのと、

「どうも、これはありがとうございます」

というので生まれなければダメだという。「俺はまだ、そう済まなくはない」なんてではダメ。百％に無条件に降参する。無条件降伏しなければダメです、キリストの前に。キリストの前に、

「もうダメだ、こんなやつ（私）は」

と言って、無条件降伏する。

「己を憎まずば我が弟子になることはできない」

という。これが困ったね、「人間形成」とか「人作り」なんて言つて、一生懸命で人間を作ろうと思つているんだ、普通の世界は。ところが、人間形成で人作りして、修養しようというのは——それはなにもわるくはないけれども——それではあるところまでしか行かないで、どうしても行き詰まつてしまう。あるところまで行ったら、

「ああ、これは人間形成なんてことではダメだ。下からではダメだった。上から生まれなくては、本当の人間形成にならない」

と。これが、どうしても、

「万人は宗教人である」

ということに気がつかなくてはいいかん。その意味からいっても、万人は宗教人なんです。神との結び付き人なんです。再び結び返すべき存在なんです、我々は。神との再び結び返しをすべき存在である。それが、

「新たに生まれる、上から生まれる」

ということです。「本願人」とならなくてはダメなんだ。キリストの本願の人にならなくては。本願人とならなかつたらダメなんです。悲願は持ちなさい。大いに人間作りで、自分は偉い人に、しつかりとした人に成りましよう願つてください。しかし、悲願だけではどうにもならん。その願いがキリストの本願によつて、

「ああ、あなたのお願いでしたか。それでは、もうとうてい、私の願いなんてものは問題になりません」

と言つて、キリストの私たちを形成せんとする、このキリストの本願に自分を乗つけて行つたならば、そのときに、「新たに生まれる」ということが生ずるわけです。

●聖霊が臨むことが新生

本願の道は既に開かれてある。十字架で開かれてある。



「門を叩け。十字架の門を叩け。悲願せよ」

と。十字架の門は開かれてあつた。罪は赦されてあつた。キリストに謝らなくては、

「すみません」

「はい。私はみんなそれは赦したよ。赦さない罪は一つもない」

と。聖霊に逆らつたこともあるかもしれない。それは一番悪かつたことだから、謝らなくては。

「私の悪口を言つたつていい。けれども、聖霊に逆らつたら、お前はもういなくなよ」

とキリストは言われる。人間イエスにいくら逆らつたつていい。いや実は、人間イエスは霊のイエスと一つですけれども。地上の人間イエスに逆らつたつて、キリストは

「まあいい。赦してやる」

「彼らは為すところを知らず」

と言つて、キリストは十字架でも赦してやつた。ところが、実は彼らはみんなこの聖霊に逆らつていたんだよね、本当は。それすらも、キリストは吞んでくださった。

「聖霊に逆らつたことが分かつたか」

ということです。「御霊に逆らつたことが分かつたか」と。十字架という驚くべき愛にぶつかつて、

「ああ、私たちはとんでもない。あなたに背いていた。神の子を十字架につけるよ
うなことをしてしまつた。これは聖霊に逆らつていた」

と、本当に平伏して、絶対無条件降伏です。

「よし、それはいい。今度は、聖霊を受けよ。祈つて待つてろ」

と。ここでも祈つてゐる。祈つて待つていたから、聖霊が臨んだんです。祈つて待つていたから、新生ということになつた。聖霊が臨むことが新生です。

「どうも、なかなか、聖霊を受けるといふのが分からないんですが」

なんて、一生懸命でやつてゐる。

簡単にいえば、私たちは水ですよ。人間の体は、90何%は水でしょ。また、私たちは空気ですよ。空気を吸わなければどうにもならん。我々の生れつきの人間というものは、水と空気という一番大事なものでできている。その空気の気ですよ。気が霊なんです。

「気の気たるものは霊なり」

です。詩篇33篇に、

「天の万軍はエホバの口によって創られた」

と書いてある。神の「ルーアツハ」によつて、「プニユーマ」によつて創られた。神の言は息によつて発せられる。「言葉は即ち気なり」なんです。



「初めに言あり^{ことば}」

なんて言うけれども、

「初めに気あり」

と言ったつていい。「気あり」と言ったつていいし、「霊あり」と言ったつて構わない。霊であり気であり言である。みなこれは一つです。気を発するところ即ち言となる。

「神『光あれ』と言ひ給ひければ光ありき」

と。その「言う」というのは、気を発したらば、神の気によってそこに光が発生する。

何といつても、私たちの心の、存在の一番中心は「魂」というよりかしようがないでしょう。魂よりか奥のものがありませんか。魂という表現よりか仕方がない。あるいは「霊」と言ったつていいけれども。

「人間は万物の霊長なり」

という。そうしたらば、その霊が本源の霊に、神の霊に結びつかないでどうしますか。霊が肉化しているから、今度は霊を霊化しろと。私たちの霊を霊化せよと。霊化するためには、神の霊を受けなければ本当の霊化にならない。「新たに生まれる」というのはハッキリ言えば、「霊となれ」ということなんだ。

「汝ら、まことの霊となれ」

と。

「主は即ち霊なり」

と書いてあるではないですか。

「主に付く者は即ち霊なり」

と言ったつていいではないか。

「主は即ち御霊なり。御霊のあるところには自由あり」

という。これは本当の自由ですよ。罪から解放されたというのはまだ消極的な自由だ。まだそれは空っぽなんだ。今度は、御霊が入ってくると、積極的な自由になる。今までの普通のプロテスタントの自由なんてものは、十字架によつて罪から贖われたと言つて、「自由、自由」と言っている。わるくはないさ。けれども、それはまだ本当の自由ではなかった。

本当の自由は、贖われた者が今度は、神の真理に即して、御霊に即して自由自在に動く。そのためには聖霊が宿らなければ、自由の実質がないわけです。これが案外、盲点なんだよ。私は向うの参考書を読んでみたつて、そういう意味において「自由」というものを本当につかまえている学者がいるかいらないか知らない。皆さんはとにかく、聖書の奥義の世界に今来つつあるので、本当に深い自信を持っていたきたい。

●気なるキリストを受けとる

⁶肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。



「肉」はなんにも悪くはないですよ。自己中心になったら、そういった意味における「肉」は悪いけれども。我々は霊肉備えている。キリストはこの肉体が靈化してしまったんだから。キリストは霊体になってしまった。甦ったのは、霊体として甦って来たんですから。

キリストの現実なんていうものは素晴らしい現実ですよ。霊体だから、戸が閉じていたって入って来るんだ。ルカ伝のお終いの方に書いてある。キリストはエマオ途上の二人の弟子に現われた。そして、その二人が一生懸命で他の弟子たちの所へ戻って来て、

「私たちはキリストにでつくわした」

と。部屋の中に入って戸を閉じたところが、キリストが現われ、

「^{おそ}懼るな。我なり」

と。「さつきお目にかかったあなたですか」というわけだ。

「何か食べるものがあつたら、食べるからね」

と。キリストは断食もなさつたけれども、ご馳走も好きだからね。ご馳走の譬えもたくさんある。お酒も飲んだらしい。全く御霊の世界で自由に支配しておられた。それだから、霊体としても、そこに十分に入って、お魚を食べたりする。

「さあ、それでは、このへんでもうサヨナラしよう」

というわけで、天界に行ってしまった。まず、なんと驚くべきことか。

この頃、いろんな新興宗教が出てきますよ。なるほど、それがインチキでなければ結構です。それぞれ結構ですよ。今のキリスト教が観念化したから、少し靈的なやつが現われてくる。けれども、このナザレのイエス・キリストのことをなんのかんの言つたつて、それはダメです。このキリストの霊の前には、どんな靈的な人物も平伏さなくてはいいかん。

キリストに逆らっていたが、

「本当に悪かった。まことにすみませんでした」

と言つて降参して、御霊のバプテスマを受けて新たに生まれた一番著しいのは、言うまでもなく、パウロである。そして、彼の福音は最も素晴らしい構造を持っている。ヨハネは深い人です。パウロは素晴らしい構造の人。

⁷「^{あらた}なんじら新に生るべしと我が汝に言いしを怪しむな。

この「生るべし」は、

「上から生まれなければどうにもならんよ」

という「べし」です。これは非常に強い。「だろー」なんて言っている「べし」ではない。

「お前たちは新たに生まれなければダメだ。いくら聖書の研究をしたつて、教会に何年通つたつて、それではダメだよ」

と。

⁸「風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者も斯の^{ごと}し」⁹」



「霊によりて生るるのは説明はつかんよ」

というわけです。風がどこから来てどこへ行くか。空気はあるが、風はない。しかしながら、空気の中に風というものは既に備わっている。扇風機が回転すれば風が起きる。私たちが本当に霊によつて生まれるためには、この無風ともなり、そよ風ともなり、嵐ともなるところの空気そのものを、気そのものを受けとる。

「霊とは何だ」

なんて一生懸命でやっているからいかん。気そのものを受けとれと。気そのものを具体的に表わしているものはキリストであります。このキリストという方を、そのままを受けとる。何かキリストの奇蹟を受けとるのではない。キリストの言をただ受けとるのではない。キリストの行為を受けとるでもない。福音書のイエスそのものを受けとる。

もちろん、その言を通して、その行為を通してキリストを受けとるなら、それはいいですよ。それを普通は、その言だけ、行為だけを受けとつて、

「ああ、奇蹟だ」

という。それから、何か不思議なことにでつくわすと、

「ああ、ありがたい」

はよかったけれども、奇蹟だけ、行為だけをありがたいとして、言葉だけをありがたいとして、あとはおしまいなんだよね。

この御霊のバプテスマを受けながら、御霊の現象にぶつかりながら、あとでまたスランブになってしまったり、ダメになったり、またそれを疑ったりして、この集会を去った人が幾人もいる。それは結局、現象を追っているから。現象に躓いている。現象を通して奥の世界に入りなさい。「奥の世界」とは「キリストそのもの」ということです。キリストそのものを受けとった人はもはや絶対に不動な人になる。キリストそのものを受けとらなくてはダメです。

「御霊」ということは「御霊のキリスト」「キリストの御霊」ということです。キリストと御霊をバラバラにしてしまったらしょうがない。我々は、贖罪し御霊を与え、そしてまたいろんな知恵を与え、力を与えるところの根源体であるイエス・キリストという方を受けとる。「受けとる」とは祈ることです。祈つてその中に入る、ことです。

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

ということ。

●今度は自分が風となる

もちろん、特別集会というのは非常に大事なものです。特別集会というひとつの場で、ある現象を通して何かに触れてください。そして、触れたら、何かを何ものかとするのではない。その何かを通してキリストをつかまえることです。キリストに本当につかまえら



れる。より深く。そうしたら、その人の信仰は本ものになっていく。「私はこういう経験をしました」なんて、経験だけを一生懸命で何か思っている人はガタツとまたおかしいことになる。そういう例がいくつもある。また、その人の性格によつては、そんな経験がなかなか出てこない人もある。いいよ。ヨハネなんていうのは、ちよつとそれが見えないんだ。スーッと入ってしまう。何か知らんけれども、スーッと入ってしまう。何でもいいですよ、人のいろいろな型があるんだから。どういう型でなければならぬなんて、そんなことを言っているのではない。問題は、このキリストを本当に受けとること。それが本当の霊のバプテスマになる。

「新たに生まれなければどうにもならん」

というのは、

「キリストの中に誕生しなければどうにもならん」

ということ。

そうしたら今度は、自分が風ですから。自分が空気だから、風を起こそうと思えば、いつでも起きてしまう。その人が何かものを言えば、その人が何か事をすれば、そこに風が起きてきて——「風が起きる」というのは、「風」という言葉でいろんなことを言っているんですけども——何かそこに起きてきて、相手の人を救いに導いていくことができる。助けることができる。それがみんな風だよ。

「何処いずこより来たり何処へ行くか知らない」

ように今度は、自分自身が「何処より来たり何処へ行くか知らない」ような人になる。自在な人になる。キリストなんていうのはそうなんだよね、どこでも。神出鬼没しゅしゅゑいぼつというけれども、神出神没です。

五千人の人にパンを食べさせたでしょ。それから今度は、みんながワッショイ、ワッショイと来るから、キリストは山へ逃げてしまった。山で一晩中祈っていた。嵐が来て、弟子たちの舟が沈みかかった。湖の上を涉つて行つた。

「私だ。恐れることはない」

と。物理法則を乗り越えてしまった、霊体化したところのキリストです。幽霊かと思ったら、

「幽霊ではない。私だ」

と。ペテロが沈みかかったので、手をとつて引つ張り上げてしまったでしょ。幽霊ではそうはいかん。まあそういうケタ違いの現実が、これが本当に罪なき人の現実である。神の霊に本当に霊化された人の現実である。これだけは、私たちの霊肉を渾然として救うことのできる唯だ一人の神の子キリストである。そこらの新興宗教の人間とはケタが違う。このナザレのイエスのことをどうのこうのと言っていたら、それは大間違いです。



●みんな落第

9 ニコデモ答えて言う『いかで斯^{しか}る事どものあり得べき』

あいかわらず、ダメです。もう落第です、こんなことを言っているうちは。

10 イエス答えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる事どもを知らぬか。11 誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを証^{あかし}す、然るに汝らその証を受けず。

「なにもニコデモ、お前に限らない。みんなダメだよ」

というわけです。ニコデモを通してみんな落第です。神の国には、教法師も祭司も学者もみんな落第です。

12 われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを言わんには争^いで信ぜんや。

「このことはまだ地のことだ。地上でお前たちの信仰のことを言っているが、いよいよ天界のことを言い出したら、お前たちはただびくりしてしまつて、どうにもならんだろう」

と。

13 天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。

ロゴス・キリストがナザレのイエスとして顕れた。アブラハムよりも前にあつた者。

「天より降りし者、即ち人の子、私の他に天に昇つた者はない。神のことを本当に知っている者はないんだ」

と。

14 モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。

この「べし」も、「挙げられなければならないぞ、必ずそうなるぞ」という、強い「べし」です。

15 すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり」

「モーセ荒野にて蛇を挙げし」というのは、民数記略21章に書いてある。

「4 民はホル山より進みゆき紅海の途よりしてエドムをめぐり通らんとせしが、その途のために民心を苦しめたり。5 すなわち民神とモーセにむかいて眩^{くら}きけるは、

ここに「眩きて」とある。

汝等なんぞ我らをエジプトより導きのぼりて曠野^{あら}に死なしめんとするや。こ

こには食物^{けいも}も無くまた水も無し。我等はこの粗^{あら}き食物を心に厭^{いと}うなりと。

こんな粗食ではかなわんと。

6 ここをもてエホバ火の蛇を民の中に遣わして民を咬ましめたまいければ、イスラエルの民の中に死ぬる者多かりき。

そういう眩^{くら}きに対して神の審判が来たわけです。



7これによりて民モーセにいたりて言いけるは我らエホバと汝にむかいて咥きて罪を獲^えたり。請^こう汝エホバに祈りて蛇を我等より取りはなさしめよ。モーセすなわち民のために祈りければ、8エホバ、モーセに言いたまいけるは汝蛇を作りてこれを棹^{さお}の上に載せおくべし。すべて咬^かまれたる者はこれを仰ぎ観^みばなお生くべし。9モーセすなわち銅^{あかがね}をもて一条の蛇をつくり之を棹^{さお}の上に載せおけり。すべて蛇に咬^かまれたる者その銅の蛇を仰ぎ観^みれば生きたり。」

(民数記略21・4～9)

これは「自分たちが悪かった」という心が大事なんです。

「自分たちは、すみませんでした。罪を犯して、悪かった」

と。罪の執り成しです。銅の蛇を棹の上に載せようが、そんなことはどうだっていい。ここに働いている法則は、彼らが「悪かった」と言うこと。そして、その悪かった原因を取り除こうとして、モーセが執り成しの業をしたということ。ここにかかっている。

●お前たちの罪は全部赦してやる

これは普通のことでもそうですよ。誰かある人を非常に苦しめて、死なしめたとするでしよ。そうすると、その人のいわゆる怨霊^{おんれい}の祟^{たた}りが来ますよ。そして、それが不当なことだつたら、その人の家に病気が起きたり、災いが起きたりします。昔からいろんな話がある。そのときに、その家の人が、

「私は悪いことをした。あの人は不当な死を遂げた。本当に悪かった」

と言って神の前に悔いて、そしてその供養をする。そしたら、その災いがぬける。そういう例がたくさんある。これは霊界というものはちゃんとそういう法則が働いている。祟りというのは、必ず道德法則が働いている。もうひとつ言うと、宗教的な法則が働いている。とにかく、神さまの真理は、曲がったことはそのまま通らない。曲がったことは必ず悔い改めて、直していかなくては。

いつかもお話したかもしれないけれども、ある村で何か災いや病気が起きてしようがない。なぜかわからない。あるとき、何かの工事で掘っているうちに、石室にぶつかった。その中に骸骨がずらつと並んでいる。この人たちは何か不当なことを受けて死んだんだろうと。その人たちの霊によって作用されているということがわかったので、村をあげて慰霊祭をした。それからその村は本当に平和になったという。

プロテスタントでは、この霊の世界が非常におろそかにされている。やはり、命日にはちゃんと祈りをしたり、お花をあげたりすることが大事なことです。我々の魂の世界は、過去・現在・未来にわたって続いているんですから。その意味において、神に本当に生きている人は永遠の世界にいるわけです。そこで、亡くなった人のために逆に執り成すこともできれば、その方々が逆に私たちを執り成しているという事実もある。死んだ人は決し



てただ死んでいるのではない。肉体が消えただけのはなしで、霊的存在としては在るんですから。お互いに他界の人たちと、だんだん神の国に一緒にひとつ行きましよう。これはもちろん、手放しでやったらいかんですよ。いつも、媒介になるのは、キリストが立つてなくては。キリストの執り成し、聖霊の執り成しによって祈りをする。いわゆる異霊との直接交渉なんかやってはいかん。そういう消息は、とにかくそういう構造であるということ、わきまえていないとね。

それで、いつも平伏しの「すみません」ということと感謝ということは非常に大事なことです。日本人は本来、祖先を尊ぶ伝統があつたんだ。なにも祖先を神さまとすることはないけれども。そういう縦の関係が非常に薄くなった。妙な間違つた民主主義になつてゐるから、日本人の魂の今の在り方は恐ろしいことです。今の若い人たちは、そういう意味において、本当に——小学校の先生からしてしっかりそのことを自覚してもらわなければ困るんだがね——ことに小さい魂は大事な魂ですから。

今のモーセの執り成しでもって助かつたわけでしょ。悪かつたと。いわんや、罪なきキリストが十字架にかかつて、

「お前たちの罪は全部赦してやる」

「はい。すみません。ありがとうございます」

と。「すみません」と「ありがとう」が一緒でもって、そこで、無条件にこの水と霊のバプテスマを受けて進んで行くわけです。だから、「聖霊を受ける」も何もないじゃないですか。もう楽にその世界に入っていく。そして、

「何かしらけれども、魂が楽になりました。キリストの生命を受けて——ちょうど、この扇風機の風を受けているような具合に——なにかすがすがしくなつてきました」

ということですよ。それでいいんです。体験の世界です。そうしたら、本当に、霊人となるから。本願の人となる。霊の人、御霊の人となる。

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

とパウロがハッキリ言っている。どうぞ、そういうことで、何もいらぬ。問題はいつも、全存在をもつて祈り込むこと。このことを怠っていたら、どんなに聖書のことか解つたつて、本当の世界に入れない。魂の世界は、祈りなきところには魂は生きない。祈りとは何か事柄をお願いすることではない。自分を投げ入れて、キリストと交わり、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という世界が御霊の内住の世界です。

●キリストが欲したままの真のキリスト教

ヒルティさんが『眠られぬ夜のために』の「12月23日」のところで、これは私の訳です



けれども、

「その時代時代の学的神学と、キリストが欲したままの真のキリスト教との間につねに存在する差別を示す典型的な聖書の章は、

そういった学的な神学とキリストが望んでおられたままのキリスト教との違いというものの一番よく分かるところは、

ヨハネによる福音書第三章である。学者のニコデモはキリストを訪問してまず初めに口を開いて、たしかに真面目な意味で「好意を「辞をひくうして」求めること」、今日のいわゆる「敬意を評すること」をなした。かくして彼は、無学者に尊敬を表示したと思った。けれどもこれにつづいて一種の教訓を与える心算でいた。ところがキリストはこの教訓を簡単に次の返答を与えることによって遮った。「我らは、我らが知ること語る。そは我らはそれを見かつ聞いたからである。けれどもあなたがたは、あなたがたが学びかつ研究したことを語る。」これが今日もなお存続している差別である。

ヒルティがそう言っているわけです。キリストは見たこと、聞いたことを語っているのに、あなた方は学んで研究したことを語っている。これは私がいつも言っている、

「聖書研究会ではダメですよ」

ということ。研究は悪くはないけれども、研究会で聖書の世界に入ろうとしたって、それはダメだと。聖書を見なさい。聖書に聞きなさい。聖書を喰らいなさい、読みなさいということ。ヒルティはもちろんちゃんとわかっている。

ひとはキリスト教を「教える」ことは出来ない。

キリスト教を教えるなんてとんでもない話だ。だから、「教」の字は嫌いだと私も言う。ヒルティさんと同じだ。

ただ他人をこれに導きかつ穏やかに案内して、次第次第に聞いたり見たりすることが出来るようになり得るだけである。そのかぎり、キリスト教は実際学問の性質をもたず、はるかに秘教

秘密の教えだね。

の性質をもつものである。しかもそのあらゆる部分において各人の眼前に開示されているのである。ただ多くの人々が、それにもかかわらず、これを洞見することも把握することも出来ない。しかもそれは必ずしも無学な人々ではなく、否むしろその反対である。

学問のある人がかえって見えない。無学の凡人の方がかえって見るという。

それ故にキリスト自身も、神の国を幼児の如く、すなわち多くの研究などを俟たず、不動の信仰をもって受け入れない者は、決してそこに入れれないと言っている。

受けとらなければ入れない。

神学はなければならぬ。



それは結構だよと言う。

神学がないと大いに困るであろう。しかし、神学は、キリスト教そのものであることからをはるかに遠い。」

とヒルティは言う。その通りです。構造をハッキリ知るために、神学で質的に一応把握することも悪くはないからいいだろう。けれども、それと本来のキリスト教とはおよそ隔たりがあると。ヒルティさんが一般の神学者に嫌われるのは、こういうことを言うからです。けれども、神学者はそれでヒルティを嫌っていたのではとんでもない。ヒルティはむしろ日本で迎えられて、ヒルティ全集が完全に訳されたのは日本が初めてなんです。ドイツの神学者はヒルティのことを言わない。「あれはちよつと神秘家だ」なんて。そうじゃない。こないだ、ベックさんからの手紙にも、

「もう、ドイツの教会はダメだ。あなたの言うとおりだ。眠っている以上だ。一般の教会はダメだが、もちろん、少数の本当の人はいる」

と私に書いてきました。ダメであつても、とにかく伝統はありますから、ドイツの社会が日本の社会よりも秩序があるし、何といつても相対的にいつて立派なのは仕方がない。いい意味における合理性はドイツ人は非常に持っています。

日本人がもつと、いい意味における合理性を持つためには、福音の世界に入らなければダメです。これは法則の世界、霊法の世界なんだから。宗教というと、何か摩訶不思議なんて思っているからいかん。私はさつきから相当、不思議なことを言ったが、決してそれは不思議ではない。

「霊の世界の法則の世界にはそういうこともある」

というだけの話だ。「あろう」ではない、大いにありますよと。日常の生活において一番本当の展開をそれぞれの在り方でなしている一番力強い法則の世界。これはハッキリしている。

●御霊の権威

ヨハネ伝19章で、キリストがいよいよ捕まってしまうて、ピラトの前でものを言っているところ。キリストはピラトの前に引つ張り出されて、そしてみんながこのイエスを十字架につけると言い出す。7節、

「⁷ユダヤ人こたう『我らに律法あり、その律法によれば死に当るべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』」

キリストのことをとんでもない冒瀆者だと言うわけだ。

⁸ピラトこの言をききて増々おそれ、⁹再び官邸に入りてイエスに言う『なんじは何処よりぞ』

どこからやつて来たのか。天から来たのか、地から来たのかと。

イエス答をなし給わず。¹⁰ピラト言う『われに語らぬか、我になんじを赦す



権威あり、また十字架につくる権威あるを知らぬか』¹¹ イエス答え給う
はい、このイエスの言葉です。

『なんじ上より賜わらずば、我に対して何の権威もなし。この故に我をなんじ
に付しし者の罪は更に大なり』(ヨハネ19・7～11)

ここでキリストはハッキリ、神の権威をもつてものを言い給うた。

「上から賜らないで、お前に権威なんかあるか。私はものを言い、事をしているの
はみな神の権威をもつてやっているんだ」

と。キリストは自分では、

「何も権威がない。何も言えない。何もできない」

と仰っている。けれども、それは神の権威を持っているからです。神の権威をキリストは
決して私しているのではない。どこまでもキリストは神の権威の人であった。

「俺は権威のある霊的な人物である」

なんて、決してキリストは言わない。イエスという人は完全に神の前に平伏^{ひれふ}している。

よく、守護霊とか、指導霊とかいうけれども、キリストの指導霊はこの全能の神である。
全能の神によって指導されているキリストですから。

「汝の御意^{みこころ}をどうぞ成してください」

と言って全託し、神という指導霊によって動いています。ソクラテスは言ったでしょ、

「自分はダイモニオンの声でもって生きています」

と。ソクラテスもやはり宗教的な人物ですよ、哲人なんて言うけれども。孔子でもやはり「天」
というようなことを言ってます。孔子もやはりある天的なものによって動いていたところ
があるわけです。要するに、第一級のもの全部、霊によって動いている。

名も無き私たち一人びとりが無条件に——主イエス・キリストは無条件ですから。

「お前はこうでなければダメだ。私はお前につかない」

なんて仰つらない——平伏しと感謝、「すみません」と「ありがとう」でもって、無条件で
キリストの中に入る。それで、一人びとりが権威ある人になつていく。これは御霊の権威
です。それが新生ですよ。新たに生まれるというのは何ということはない。もうみんな生
まれてしまっている、楽に。

もう恐いものはないですよ。あの人がどうだから、この人がどうだからと、そんなくだ
らないことはよそうじゃないですか。人なんかどうだっていいじゃないですか。人なんか
を気にしているうちはダメですよ。みんなもうキリストに直結して、何がどうなろうと、
びくともしないというところに誰でもが来ている。私みたいな生れつき臆病な弱虫がどう
してこんなことになつただろうかと、自分でも不思議ですよ。このキリストに捕まらなかつ
たら、私なんか今頃どうなつていたかわからない。それで何も恐いものがなくなつてしまつ
たからね、正直。人間としての恐さなんてものは、人間としての感情としては、今でもな



お私は弱虫だから、あるでしょう。けれども、その奥にもうそうでない世界が来てしまっているから、いつも自分を乗り越えて行くことができるという始末です。仕方がない。やむえざるなりです。

それだから、本当に我々自身が風の如き人です。風ともなり、水ともなり、空気ともなり、火ともなる。何にでもなれる。そういうような自在なものです。その聖霊の世界はみんなそういうものをもつて表わしているんです。

●人間は遊ぶときにのみ全き人間である

ニコデモなんていうものは、学者が大きな躰をしていて。こういう例がそのまま載っかっていて、大変おもしろいでしょ。聖書はドラマ、劇だから。たくさん劇があつて、お芝居を見に行くけれども、一番おもしろいのはこの聖書です。聖書の事態を本当に劇的にできたら、これは大した学者だよ、キリストとなれたら。キリストとなつて、これをやつたら大変なもんだ。とにかく、そういう意味において、私たちは「新たに生まれる」とは正にそのような霊人となつていく。そして、自由自在。もう勉強することも遊ぶこともみんな楽しい。すべてが楽しい。

私はこないだ書いた論文「ルターとシラー」の中に、こういうシラーの言葉がある。

「人間は言葉の全き意味において人間であるときに於いてのみ遊ぶものである。そして、

人間は遊ぶときにのみ全き人間である。」

と。シラーが到達した最後の世界はこれなんです。シラーという人は早く亡くなって惜しいことをしたなと思うけれども、「遊ぶ」ということ。子どもは全存在をもつて跳ね回ったり飛び回ったりして遊ぶ。本当の姿はこの遊びだということは、ルターがしょっちゅう言うところの

「ミット ルスト ウント リーベ」（楽しみと愛をもつて）

ということ。楽しみと愛をもつてしないことは本ものではない。ある時は努力精進を大いにしたつていいさ。わるいとは言わないけれども。それから突き抜けて、本当にそれが楽しみとなり愛となる。ドイツ語だつてそうなんです。始めは苦しくたつて仕方がないよね。けれども、私は「勉強せよ」とは言わない。「親しめ」と言う。

「毎日、親しんでください。そのうちに楽しくなるから」

と。人間は本当に力一杯楽しいときに、それが本当の人間だという。それは「遊び」というものだ。勉強しようが、仕事をしようが、それが遊びの境地にならなければ本ものではない。それは老子が言うところの「無為の為」ということ。何もしないようだが、実は一切のことができる。みんな共通しているんです、本当の世界は。だから、シラーのことをただ観念的な「センチメンタリズム」なんてレッテルつけたような言い方をするから、「冗談じゃない」と私はシラーのために弁護してやった。



●素朴な信仰

また、シラーはおもしろいことを言っている。

「文学には素朴（ナイーブ）の文学と感傷（センチメンタル）の文学がある」

と。感傷（センチメンタル）でないのが素朴（ナイーブ）なんです。信仰の世界も正にそのとおりなんです。今の普通の信仰はみなこの「センチメンタリズム」です。「ナイーブ」な「素朴」な信仰でない。「素朴」な信仰は、この霊的な信仰が「素朴」なんです。聖書の言葉をまともに受けとつてしまう。まともに受けとつてしまつて、

「いや、その現実をもつと凄いんだ」

と言つて、まともに受けとつて、「これがどうだ、ああだ」なんて意味を詮索している世界ではない。普通はすぐ「解釈学」だとか、「意味」だとか、「聖書解釈」だとか言っている。解釈なんかしなくたっていい。内村鑑三もたくさん解釈を書いたけれども。私のは解釈ではない。告白なんだ。まあ、内村先生も告白的な解釈だから、内村先生はいいんですけれども。もつと内村先生もハッキリ言つたつていいと思う。ぶちまけているんだ、イエスなんていうのは。キリストなんかひとつも解釈なんかしていない。

「聴く耳ある者は聴くべし。見る目ある者は見るべし。聴く耳のない者は仕方がない」

なんてなわけだ。「随分、不親切だな」なんて。けれどもそれが本当の親切なんだ。もちろん、ある時はお話し合いでいろいろ言います。けれども、それでどうかということではない。

だから、信仰も素朴な信仰が大事です。「どうだ、こうだ」と言つて詮索している、思われている世界は感傷の世界。「われ思う故にわれ在り」なんて、デカルトが余計なことを言うものだから、みんな意識過剰になつてしまった。そういう素朴な信仰です。

「幼児の如くにならずば」

とキリストが言われたのは、「素朴になれ」ということです。

「お前たちの魂が、心が素朴になれば、凡人ただひとになれば、その世界に入れる」

と。「こうだ、ああだ」と詮索しているうちは、「について」語つたり、「について」研究しているうちは、どこまでも観念信仰の感傷信仰である。センチメンタリズムである。

だから、おもしろいと思つて、私はこういう論文を書いた。案外、盲点があるだよね、世の中には。皆さんもどうぞ、聖霊の光でものを見ていくときには、諸所方々に真理が転がっていますから。自分の小さな主観だとか、主義なんてものはやめたがいい。

私たちの立場ならざる立場というのは、そういうイエス・キリストに甦る。キリスト者というのは正にキリストに甦っているところの人。キリストをもつてバプテスマするところのものである。聖霊のバプテスマとはキリストの中に入ることである。もう何回言つたつてしょうがないからやめましょう。そういうことです。

